

人の如くに、神が天地を創造したと云ふを、明白に物語る神話を有しない。併しながら混沌を説き、これに續くものとして、天地の結婚に依りて、巨神、四眼、百手が生れ來て、神々の世代の生ずるを詳述してある。

次に、この世代の交替に當りて、戦が行はれたと傳へられる所以を説き、更に、ゼウスの統治する神々に移行行き、茲に、希臘の自然現象の反映が如實に表現されて來る。河泉、天象、風雨海、の項目の下に縷説されて居る。河神の怒、エオスの悲歎、ボセイドンの出自、等興味深いものが相序いで、描出されて居る。

希臘神話と生活技術に於て、希臘民族の生活が物語られ尊嚴に、牧畜に、將た農業に於ける姿を神々を通じて窺ふことが出來る。更に、技術的方面、乃至は商業貿易に亘つては、想像の翼に乗りて、自由の境地に天翔り行く前影が見られる。巧緻が發計と變じ、敏捷が譎詐に陥る場合が屢々起る譯である。

最終に、人類發生につき、人は自生者として神の後裔として、或は神の創始として、夫々説かれて居るを擧げてあり、更に、文化事象に説き及ぼして、社會的秩序を守る神と、人間の私生活に關する神が記述されて居る。

希臘人は、恒に、萬物の基準を人においた。されば、神々が入間らしく觀察されて居ることは、餘りにも、有名ではあるが、神と人との間が比較的近く、従つて、兩者の交渉も自然密接にして複雑多岐なるものあるを窺はれる。

以上、極めて概略的なる紹介に止まるが、説いて餘蘊なく、流

麗なる筆致の中に能る滋味は、著書の努力の並々ならぬを觀ると共に、神話を説く一方法を指示されたるを悦ぶものである。挿入されたる三十六個の豊富なる説明圖は、その選擇の適正なる理解を助くるに與つて力があるは云ふを俟たない。

著者は自序に於て、「……希臘の神話だけについていふならば、神話について知りたいと云ふ人に即座に勸めうるやうな書物は邦文には見當らないやうな有様からいつて(中略)……こんな本でも無いよりは況しではなからうか……」と書かれて居る。これは素より著者の謙遜の床しさを觀ると共に、茲に抱負をも窺はれるものがあると信じる。

西洋史の源を窮めんとする學究にも、唯、希臘神話を概括的ながらも、根柢ある把握をなさんとする一般讀者にも恰好の書として、江湖に推薦したい。(弘文堂發行、定價五〇錢) (岡島)

### ランケと世界史學

鈴木 成 高著

歴史は單に事實の集積ではない。歴史が眞の歴史であるためには統一をもたねばならぬ。統一の構造の上に事實は初めて歴史學的事實となる。普遍を缺如した個別は事象であり得ても歴史的事實ではあり得ない。

十九世紀の政治史觀は歴史を政治に從屬せしめた。歴史の過去は政治的未來のために翻譯された。この政治史觀に對して起つた所謂文化史觀は歴史を政治から獨立せしめることに成功した。過

夫は未来のためにあるのでなくてそれ自身の價值をもつ——この歴史主義の確立は文化史觀の業績であつた。けれども文化史觀は一方に於いて事實を文化價值といふ超時間的したがつて超歴史の普遍的の直覺的表現とすることによつて歴史を靜態化し、他方に於いては歴史事實の限界性を喪失せしめて凡そ人間の生活遺産全體を歴史事實とする人類史の立場に墮ちいらしめた。かくして歴史は歴史的時間と歴史的空間とを失つた文化の類型學となつたのである。

では一體歴史學を成立せしめる歴史の普遍とは如何なるものかそれは歴史學の現代的課題でなければならぬ。讀者は本書の中にこの課題に對する明快な解答を見出すであらう。本書の學界への功績も、それが單なるランケ史學の複製や註釋ではなくして、むしろランケを媒介して歴史學が直面する課題に對する明晰なる解答克服である點にあらう。

本書は一、歴史主義、二、政治及び國家、三、世界史の問題、四、ヨーロッパの世界史への展望の四章からなる。筆者の理解が誤つてゐなければ本書は第一章から第三章迄と第四章との二部に構成される。前者においては世界史學の構造とその現代的意味が主題であつて、後者は具體的な世界史の歴史の展望である。従つて第三章迄を先づ一貫して讀むべきであらう。

著者は先づランケ史學の出發がランケの宗教性から来る獨特なものであることをのべる『ランケにとつて歴史はそれ自身が自己目的である』。而もランケにとつて『本來如何であつたかと問ふこ

とは一つの宗教である。』事實及び事實の關聯は『神の證し』である。かくしてランケの歴史主義と世界觀は十八世紀の合理主義的世界主義とは異つた『宗教的非合理的根據から出發してゐる』。では歴史主義に立つランケが歴史主義の危機が叫ばれてゐる現在に於いて何故考察されねばならないか。それは『ランケが世界史家である』からである。この意味でランケ史學は『單なる懐古的歴史主義、古物的歴史主義斷片へ引裂れた個別研究に對立する』。同時に『ランケの世界史は世界史の哲學から區別されねばならぬ。フイヒテヤヘーゲルによつて示された世界史の圖式は概念的虛構である。』ランケの普遍は『先驗的理念から推論されたものでなく、客觀的に實在する普遍的關聯である。』かくの如くランケの世界史學が具體的な歴史哲學であると共に、危機を叫ばれてゐる歴史主義を克服する道であることを主張した著者は次にランケ史學の基本概念——發展・傾向・世界史の理念——を明かにする『發展の概念は歴史主義の基本概念である。それは時を超えた人間の自己同一性即自然法的抽象的人間觀を克服する』。と共に、『進歩の觀念、完成の觀念を覆すものである。』進歩觀念から云へば『一般に後の時代は前の時代よりより高い段階とされる』。ランケにおいては時代の價值はその由來にあるのでなくてそれが本來何であつたかにある。……時代は過程でなくて本質である。發展の概念で事實の、時代の本質性、獨立性を説いた著者は傾向の概念において時代の接續をとく。傾向は必然と自由との對立から生れる。傾向の變化、そこに時代がある。我々はここに非連續の連續としての歴史的世界の論

理的構造をみるであらう。次いで著者はランケ史學の最も難解な點と考へられる彼の理念説をヘーゲルの理念と對比する。ヘーゲルの世界精神は歴史を超えたもの歴史の外にあるものである。けれどもランケの世界史のイデーは『歴史の中にあるもの、事實そのもの』であつた。だが『ランケは事實に於いて理念をみるけれども決して理念そのものを直接考へることをしない。理念を考へること、理念の顯現を考へることは區別されねばならない。』

次いで著者はいよ／＼世界史の構造を展開する『世界史の地盤は人類でなくて民族である。民族と民族との共存對立する所に世界史がある。』著者においては民族は單なる歴史の基盤でなくて『歴史を動かす』主體性を擔ふものである。著者がしば／＼民族を國民と言ひ換えたのも恐らくかゝる觀點からであらう『併し國家は民族と同意義ではない。……それは自己自身の内に原理をもつ個體である。』國家は單獨に國家であるのでなくて他國家と共存し他に對して自己を主張するものである。かくて國家系が生じ、『國家系は國家系を通して表現された世界の在り方』なのである。かくの如く具體的な民族、國家に於いて成立するランケ史學が政治的色彩の濃度をもつ點を指摘しつゝも、ランケの政治史が、『政治に從屬する歴史、政治に奉仕する歴史』から區別されねばならないと主張する。ランケにとつて『事實の認識が眞の教訓であり、彼の政治記者生活も『歴史にもとづかない理論と闘はんがためであり、歴史學を主張するためであつた』と説く。更に歴史に於ける個人性の『創造的契機』としての重要性を主張する。歴史が

科學性を要求する餘り抽象的な形態論に墮り勝ちであつた從來の史學に對する著者の抗議であらう。

次で著者は世界史は『權威的歴史』でなければならぬと主張する。世界史の普遍は『包括的全體でなくて意味的全體、構成の體系的完結性』をたねばならぬ。かゝる意味での『世界はヨーロッパ以外にはない。』ヨーロッパが唯一の世界ではなくなりつゝある『現代を直觀する著者は、遙にランケ的世界像の克服の意向を示しつつも、ヨーロッパの世界化が進行してゐた時代のランケにとつて、世界がヨーロッパであつたことの『歴史的正しさ』を認める。

ランケにとつて『ヨーロッパ世界はローマ風ゲルマン風世界』である。古代の希臘風ローマ風世界に對照するとき、中世と近代とは同一の世界秩序に屬する。従つて世界史は古代と廣義の近代との二つの構造體系から成り立つ。而らば具體的に言つてヨーロッパとは何か。それが第四章のヨーロッパの歴史的發展である。これはヨーロッパの成立・縮少・膨脹といふ獨特な觀點から構成づけられたヨーロッパ史の縮圖である。歴史的諸問題の詳述でなくて問題考察の觀點を示すものとして注目すべきであらう。

ランケが我國に紹介されて既に幾年か経ち、近時歴史哲學への關心が高められるにつれて増々ランケが顧みられつつある。けれども本書裡ランケ史學の本質をついたものはない。ランケを知らんとする者も、一般に歴史學について考察するものも共に一讀すべき書として推薦したい。(弘文堂發行、教養文庫、定價五十錢) (井上)